

科目ナンバー	年度・学期	時間割所属・時間割コード	開講年次	単位数	曜日・時限
RDM7-013-83-2	2024通年	医学教育部(20140)	1, 2, 3, 4	2	他
科目名(講義題目)			担当教員		
腫瘍先端医学理論I [Advances in Oncologic Medicine] (C5 (1) 腫瘍学全体の概要とその理解、(2) 消化器外科学の現状と最新の知見、(3) 顎口腔腫瘍学の現状と最新の知見、(4) 呼吸器外科学の現状と最新の知見)			鈴木 実, 荒木 令江, 宮本裕士, 中山 秀樹, 今井 克憲, 林 洋光, 馬場 祥史, 岩槻 政晃		
学修成果とその割合					
1.高度な専門的知識・技能及び研究力 ……45% 2.学際的領域を理解できる深奥な教養力 ……35% 3.グローバルな視野と行動力 ……10% 4.地域社会を牽引するリーダー力 ……10%					
授業の形態	講義				
授業の方法	質疑応答を重視した講義形式で、Power point等を活用する。なお遠隔地の学生や社会人学生等には、補講、集中講義、ビデオ講義あるいはe-ラーニング等により対処する。				
授業の目的	腫瘍先端医学理論Iに関する講義では、以下のことを理解することを目標とする。(1)腫瘍学全体の概要とその理解、(2)消化器外科学の現状と最新の知見、(3)顎口腔腫瘍学の現状と最新の知見、(4)呼吸器外科学の現状と最新の知見				
学修目標	<p>【A水準】</p> <p>ヒト腫瘍の原因、発生から進展、浸潤・転移のメカニズムについて最新の知識を身につける。その一方で、各腫瘍の疫学から診断・治療までの最新の臨床医療についての知識も身につける。最終的に、基礎と臨床の知識を統合し、最先端医療を行う過程で、課題を見出し解決する能力を身につけ、自ら実践していくことを目標とする。</p> <p>【C水準】</p> <p>ヒト腫瘍の原因、発生から進展、浸潤・転移のメカニズムについて最新の知識を身につける。その一方で、各腫瘍の疫学から診断・治療までの最新の臨床医療についての知識も身につける。</p>				
授業の概要	<p>腫瘍発症のメカニズムに関する歴史的発見と現在までの研究の発展に関して概説するとともに、世界的にも最先端の研究の例をあげ、当研究室の研究を含めて講義する。特に腫瘍関連遺伝子の細胞内分子メカニズム、細胞周期、細胞死、分化異常に関する研究、これに関連した治療薬、分子診断技術としてのゲノム・トランスクリプトーム・プロテオミクス、最先端の話題としてがん幹細胞に関する最近の知見を講義する</p> <p>食道癌、胃癌、大腸癌、膵癌、肝癌、胆道癌、GIST、などの消化器癌は、患者数も多く、癌の中でも中心的な位置を占める。各消化器癌における標準治療、および難治癌、転移を伴う進行癌、再発癌に対する先進治療について解説する。</p> <p>口腔扁平上皮癌の予後を左右するものは、周囲組織への浸潤と頸部リンパ節への転移である。そこで、今回は本腫瘍の浸潤、転移機構に関連する各種接着分子、蛋白分解酵素の働きについて解説する。</p> <p>呼吸器外科の進歩は結核外科時代から受け継がれてきた伝統と画像診断を中心とした機器の発展に依存するところが大きい。がん死亡の大きな部分を占める肺癌を中心に、診断および治療の最先端の知見および当科での研究の一端を講義する。</p>				
各回の授業内容					
回	月日	授業テーマ	内容概略		
1	10/08	4時限 荒木 令江 【eEJ-L】	腫瘍医学総論 ----		
2	10/15	4時限 荒木 令江 【eEJ-L】	腫瘍医学各論1 ----		
3	10/22	4時限 荒木 令江 【eEJ-L】	腫瘍医学各論2 ----		
4		宮本 裕士 【eEJ-0】	消化器外科学総論 ----		
5		今井 克憲 【eE-0】	消化器外科学各論1 ---		
6		林 洋光 【eE-0】	消化器外科学各論2 ---		
7		馬場 祥史 【eE-0】	消化器外科学各論3 ---		
8		岩槻 政晃 【eE-0】	消化器外科学各論4 ---		
9		宮本 裕士 【eE-0】	消化器外科学各論5 ---		
10		中山 秀樹 【eEJ-0】	顎口腔腫瘍総論 ---		
11		中山 秀樹 【eEJ-0】	口腔扁平上皮癌の診断と治療		
12		中山 秀樹 【eEJ-0】	口腔扁平上皮癌の治療上の問題点と課題		
13		鈴木 実 【eE-0】	胸部腫瘍総論 ----		
14		鈴木 実 【eEJ-0】	肺癌 -----		
15		鈴木 実 【eE-0】	縦隔腫瘍、その他 ----		
授業外学修時間の目安	本科目は、90時間の学修が必要な内容で構成されている。授業は30時間分(2h×15コマ)となるため、60時間分相当の事前・事後学修(課題等含む)が、授業の理解を深めるために必要となる。				
テキスト	特に指定はしない。				
参考文献	<p>・「がんの生物学」ロバート・A.ワインバーグ/武藤誠 南江堂(翻訳版) 「The biology of cancer」Weinberg RA, New York: Garland Science.(英語版) 「がん遺伝子の発見 がん解明の同時代史」・黒木登志夫著. 中央公論新社、「疾患プロテオミクスの最前線-プロテオミクスで病気を治せるか」、戸田年総・荒木令江編 遺伝子医学MOOK、メディカルドゥ。 Cancer: principles & practice of oncology. DeVita VT Jr, et al., editors, Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins. Abeloff MD, et al.: Clinical Oncology. New York: Churchill Livingstone. ACS surgery: principles and practice. Wilmore DW, et al., editors. New York: WebMD. 顎口腔医学推薦書</p> <p>先端医療シリーズ26 呼吸器外科の最新医療(末舛恵一・人見滋樹監修、先端医療技術研究所、2004年)</p>				
履修条件	本授業に関連する基礎的な知識を有すること				
評価方法・基準	講義中の態度、講義中の質疑応答や、講義終了後に提示されるテーマに関するレポート等により、【授業の目的】に掲げた事項についての理解度を評価する。				
使用言語	「日本語と英語によるミックス」授業(-----)				
教科書・資料の言語	「日本語と英語を併用した」テキスト(-----)				
実務経験を活かした授業	該当(手術、診療に実際に携わる医師が最新の情報と技術を持って講義を行う)				